

ふるさと風

第74号 (2012年7月)

風に吹かれて (53)

白井啓治

『ジャガイモの花にトマトの実が生った』

庭の二坪程度の畑に春先にジャガイモを十個ほど植えたのであったが、今年は畑の栄養が良かったのかすくすくと葉が伸び小生の腰のあたりまで育ち、綺麗な花を咲かせた。ジャガイモの花もよく見ると実に綺麗な花で、摘んで一輪挿しに投げ入れ楽しませてもらった。

花が咲き終わったところから、トマトのような実があちこちたわわに実り始めた。ジャガイモの花に実が生るなどとは思ってもいなかった。早速、植物辞典をめくってみると、ジャガイモの花にも実をつけることがあるのだという。ジャガイモはナス科の植物で、トマトもナス科の植物と出ていた。成る程それでトマトと同じような実をつけるのかと納得した。実を摘んできてナイフで切ってみるとまさしくミニミニトマトであった。

トマトと同じ仲間なら、ジャガイモの実も食べられるのかなと思つて臭いを嗅いでみたら、何となく食欲をそがれるような青臭さがあった。下痢でも起こしたら困ると、舐めてみる事を止めたのであったが、翌日の新聞にジャガイモにも稀に実をつける事があると出ていた。ただしその実は毒

性があるので食べてはいけなと出ていた。舐めないで良かったわけである。私にもまだ野生の危険予知能力が残っていたのかと、安心と同時に自慢げな笑みがこぼれてきた。

ジャガイモの実は7、8年に一度ぐらいの割合に生るのだそうだが、気象条件などが影響するようである。もしかしたら竹の実のような意味合いでもあるのだろうか。しかし、食べられないのなら実は生らなくてもいい。

さて、ことは座の6月公演に合わせて、当ふるさと風の6周年記念を行ったのであったが、無事終了することが出来た。6周年記念として、ことば座の公演の中で、この会報に投稿いただいた市川紀行さんの「ついに太陽をとらえた」という詩の朗読をさせて頂いたのであったが、公演後この詩の掲載した会報のバックナンバーがないだろうかというお話を何人かの人から頂き、記念行事として朗読を行った意義が認められ、嬉しい思いにさせられた。詩を投稿いただき、朗読の承諾を頂いた市川さんには大いに感謝である。

いま改めて市川さんの「ついに太陽をとらえた」を読み返し、自分の思う、考える問題意識はハッキリと大声で言うことが重要であることを知らされた。ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会では、「ふるさと歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

える、とする当風の会も改めて禪を締め直すことの必要性を問われた思いであった。

当会の6周年記念展とことば座の定期公演が終わり少し時間が出来、何気なく本棚から引つ張り出してきた立原正秋氏の小説にこんな一文が出ていた。『京都のまちにいと、ときたま潮騒のような音を耳にすることがあった。永遠に未完のままの奈良は、素朴で重いまちだったが、京都は完成されたまちで、完成の背後にみえるのは、平安から室町末期にかけての夥しい文化である。殊に足利幕府のはじまりから崩壊までの中世がこのしてくれた光芒があった。潮騒のような音はそれから歴史の音だった』と。

若いころに何度か京都に出かけたが、京都の持つ美とは歴史の中の乱世がうんだ美ということが出来る。この石岡は歴史の里と称してはいるが、歴史の中に潜む美のない所である。

そんなことをいうと、昔から焼打ちにあつたり、大火に襲われたりで焼けてしまったから、との言い訳を聞く。しかし美を内包した潮騒の音というのは物があるとか無いの問題ではない。人の心に遺伝子のような感じにある文化としての美意識の事である。そして美意識を持つての日々のくらしの希望の音である。

先日の定例会の事であった。6月公演が美浦村の伝説話を取り上げての物語であった事から、石岡の伝説話にもスポットを当てて舞台にかけて欲しいと言われた。その時、こんな風にお答えした。石岡にある伝説話は、もう伝承の力を失った話ばかりなので脚本にするのは難しい、と。

石岡に伝わるという伝説をモチーフにした物語を何本かは書いたのであるが、実際に書き上がった物語は、伝承をモチーフではなく、こちらの想像の中の物語をモチーフに、石岡の伝説を当ては

めただけのものになってしまった。だから、石岡の伝説として語る物語にならなかったのであった。それで、以後は霞ヶ浦を中心とした常陸国の風景などをモチーフにしてそこに歴史的な事実を加味した物語を書くようにしたのである。

伝承力を失った伝説というのは、単なる昔話になってしまい、文化力としての暮らしの力を持たない記録文になってしまふのである。

このふるさと石岡を歴史の里と称するのであれば、比較にならない比較での優位や自慢にならないものを自慢する歴史を捨てて、文化力を持った美の創造を考えていける風土を築き上げて行くことが必要なのだろうと思う。

未来人からの預かり物

菅原茂美

『現在の地球は、未来人からの預かりもの』：とも言われる。この考え方からすれば、人様から物を借りたり預かったりして利用したなら、傷や汚れのまま返すわけにはいかない。きちんと掃除をし、傷ついた部分は修理をして、心からお礼を述べて、お返しするのが社会礼儀というもの。それを今、地球上に住んでいる人類は、資源などすべて我がもの顔。子孫の利用権利など、知ったことじゃない。早い者勝ち：とばかりに争奪戦を繰り返す。目先の利益追求に翻弄されている。

化石燃料など埋蔵資源・鉱物資源・生物資源など、オレが先に使わなければ、ライバルが先に利を得る。一刻も猶予ならない。阿修羅の先陣争い。中国など、沿岸国でもないのに、北極海の海底

に旗を立て、将来、海底資源開発の権利を主張する。近隣の島々など、みんな自分のものだと言っている。そして、他国の山林などを買いあさり、あらゆることか、月の表面さえ、将来自分達が発掘する「場所取り」をしようとしている。先哲の孔孟思想など、一体どうなっているの？ 国家の品格など、どうでもよいのか。

地球に突如発生した人類という新参者の寄生虫は、国境線などという他愛もない「線」を引いて、この範囲内の物は、全て俺のものだと主張する。

【動植物を外国から輸入するには「検疫」という網をくぐらなければならないが、渡り鳥は人間の浅智慧をせせら笑うように平然と越境してくる。国境線など幻影に過ぎない。熱帯病患者を吸血した昆虫も台風などに乗って飛んでくる。黄砂にもどんな病原体が含まれているか知れない。

日本は世界でも珍しい狂犬病清浄国だが、狂犬病は殆どの哺乳類に感染する最悪の人畜共通感染症だ。近年北海道にロシア漁船が寄港し、人と一緒に犬まで上陸し、帰りに犬は行方不明。もし、この犬が狂犬病潜伏中だったら、犬をはじめ狐・狸・鼬(いたち)・貂(てん)・蝙蝠など野生動物に感染したなら、日本はお手上げた。犬は法律で狂犬病予防注射が義務付けられているが、日本では接種率50%を割っている。蔓延を防止するなら接種率80%は最低必要だ。法律やモラルを守れないのなら、犬を飼う資格はない。】

強情で強欲な体毛を失った奇異な動物。単なる自然の一部にすぎない一種の動物であるはずの人類。これが、万能の神様の課長補佐ぐらいの、うぬぼれ様で、傍若無人極まりない。やることなす

こと悉く乱暴で、自然の秩序を乱す。それに気づかないのなら、或いは途中で軌道修正できないのなら、何でそんなに大脳を膨らましたの？

水や大気を汚染し、地下は穴ボコだらけ。あちこちの海でサンゴが死に、魚が住めなく、海藻は繁茂しなくなる。そして巨大なビルという蟻塚を造り、道は悉くコンクリートで固め、生態系を破壊する。山を切り崩し、川をせき止め、魚が移動できなくなる。地下水を汲み上げ過ぎ、地盤沈下を起したり、砂上の楼閣みたいに新興住宅地は、地震の度に液状化現象とかで大騒ぎ。すべて人間の浅智慧の結果だ。

* * * * *

一方、動物の乱獲や駆除により、自然界の食物連鎖のルールを破壊する。狼・虎・豹など絶滅寸前だ。(そのよい例として明治政府が懸賞金付きでエゾオオカミを駆除したため今、知床のエゾシカが過剰繁殖。森林や農作物被害が甚大。交通事故多発で苦悩している。)更に農薬や除草剤により昆虫や植物など絶滅のピンチはどこでも見られる。

アフリカのマリで見つかったイネの原種は、イモチ病の抵抗遺伝子を持つていることが発見されたが、絶滅寸前であったという。(稲の改良品種は、イモチ病にかかりやすいが、この原種の抵抗遺伝子を導入したら、改良品種でも、ほとんどイモチ病にかからないことが実験で立証された。原種を失うことは、改良の基礎をなくすことである。)

人類の活動による自然破壊は、地球表面だけではなく。成層圏以高でも、植物が何十億年もかけて造り出した酸素の層(オゾン層)が、有害紫外線を吸着。植物や動物が陸上に進出してもDNAを破壊しない恩恵をもたらしている。ところが人間活動によるフロンガスなど化学物質により、オゾ

ン層を破壊(オゾンホール)し、地上の生物に重大な障害を与えている。人間自身も加齢性白内障やシミ・ソバカスなどで障害を受けている。(馬や犬の白内障被害も大きい。)

そして、更に人間活動は宇宙にまで及び、危険なオモチャが、とんでもないスピードで駆け回っている。気象・電波中継衛星など、恩恵が大きいように思うが、それは人工衛星のほんの一部にすぎない。圧倒的に多いのは偵察目的等の軍事衛星だ。それらが、寿命を終え、地上に落下してくる。

大方は落下途中で燃え尽きるが、大きな塊が地上まで届く場合もかなりある。いづどんな災害にあうかも知れず、人間行動の愚かさにあきれる。

水の惑星地球で、生物達は長い年月をかけ、穏やかに進化を遂げてきた。生きた化石と言われるシーラカンスなど、4億年もほとんど姿を変えないことなく、コモロ諸島近海で、現在もひそかに生き続けている。悠久の時の流れの中で、生命の継続を謳歌している。それなのに人類という後発部隊のモンスターがこの世に現れ、そのずうずうしい活動のために環境が一変され、多数の生物種がこの世から消え去っていった。他の種の生命と奪の権利など、誰にもありはしないはず。それを平気で行う人類とは、一体なものなのか？

我々の子孫が、将来利用する権利のある限られた天然資源などを、現代人が今、後先を考えずに、利用し尽したら、どうやって子孫達は、将来生きていけばよいのか？...

子孫のことなど知るもんか。今の今、どうやって生き延びるか。伸るか反るかの瀬戸際に、遠い未来のことなど、構っちゃられない……。これでは、万物の霊長などと威張る資格は全くない。

人類はもつと穏やかにスローに進化を遂げるべきだった。人類の祖先が石器を作り始めた頃、石斧は、100万年も全く同じ形であったという。

【西洋の「個人主義」主体の考え方からすれば、子孫といえども、何代か過ぎれば、所詮は他人。ファミリーとして家族の「絆」が太いのは、子供が小さい時だけのこと。成長すれば、子供といえども、独立・独歩を促す。いつまでも親が子どもの面倒などみていられない。

私は、オーストラリア・ニュージールランドを旅した時、農村や街中の家の前に For sale (売り物) というオークションの大きな看板が非常に目立っていた。理由を聞くと、街では子供の教育のため、有名学校などのある街に家族ごと引っ越してきて、一定の教育期間を過ぎると、家ごと売りに出し、また田舎へ戻る例などが多いためだという。

農村では、農園や牧場などを、経営者が年老いて手放し、老後の生活資金とする為、売りに出す。決して日本みたいに、親が子供に、全財産をただ譲り渡すのではないという。従って、子供が親の財産を購入する能力がなければ、他人に通常の値段で売り渡す。「家」を中心とした封建的な昔の日本と違い、西洋の個人主義的思考なら当然、「見孫のために美田を買わず」...となり、自分達の財産は自分達で使い果たす。子供は成長したら、自力で生きてゆけ...ということになるのであろう。

現在の地球資源を枯渇するまで浪費する深層心理は、西洋の個人主義的思想が根本にあるのである。日本の先住民アイヌには、自然資源は、最低限度必要だけを神様から分けてもらおうという、謙虚な思想が貫かれていたという。】

西洋的な個人主義が良いのか、日本的な家系を

重んじる習慣が良いのか、それは各人により考えが異なるであろう。しかし、どちらの考えにしる、人類も一種の生物として「種の寿命」という観点から見たら、即ち人類という動物のDNAを永劫に継続することが本来の使命と考えたら、子孫がより安全に生存できる環境を残すということは、何より大事なことはないのか。一代限りで使い果たすという思考回路は、私にはない。

それゆえ、直立二足歩行を始めた事をもって人類の誕生とするなら、700万年も延々と続いたDNAの鎖を、「文明の発展」などという空手形で、易々と断ち切ってはいけないと、私は強く言いたい。急速な文明発展が、人類の寿命を縮める。

今の時代の人類に、先を見通す力が不足すれば、破滅が近寄っていることを見抜けない。大気汚染のビッグ2の中国は、産業拡大を遅らせる規制など全く頭がない。アメリカは高度のエネルギー消費を抑制する気など毛頭ない。この両大国に、発展途上国のインドなどが、CO₂削減国際会議で異を唱え、削減は先進国がやればよいと譲らない。責任のなすり合いだ。

こんな状況で、地球は荒れ放題。人間の無節操な欲の深さがもたらした悲劇だ。資源の枯渇や環境破壊。それにいずれの国も莫大な借金を抱えている。自分で支払い能力がなくて、人気取り政策で巨大な予算を組み、借金を子孫に付け回す。これでは後を引き受けた子孫は、たまつたもんじやない。マイナスの遺産など受けたくもない。さりとて、相続拒否ともいじめ。地球を脱出したくとも、行くあてもない。

【この天の川銀河には、恒星がほぼ1000億個存在する。その中には、恒星と惑星との距離や

質量・構成元素など、計算上は太陽と地球の関係に似て、生命が存在しうる惑星の数は、100万個ぐらいいは存在するはずと言われている。しかし、生物が生存するのに適切な温度で、水が3態(個体・液体・気体)をなし、水に溶けるミネラルが適切に存在し、大気の組成や気圧、引力の強さ、地盤を構成する元素の割合、そして宇宙から飛来する放射能など、地球環境によく似た生存環境を存分に備えた惑星など、そうそうあるものではない。例え有ったにしても、そこまで、どうして辿りつく? 種を保存しようとすれば、近親交配を避けるため、最低でも合わせて男女500人は必要と言われる。他の恒星に随伴する最も近い惑星までマツハ50で飛んでも、何万年もかかる。仮に辿り着くまで1万年と仮定したら、到着するのは400代目の子孫ということになる。その間の燃料や生活物資を、どうやって運びますか? 宇宙戦艦ヤマト級の輸送船団を組んでも、運びきれない。全く気の遠くなる話であり、漫画やSF小説等は、子供だましの戯れにすぎない。それゆえ地球などよりはるかに文明の進んだ宇宙人がいたとしても、大した魅力のないこの地球に、わざわざ侵略するため、来るわけなどありやしない。彼等がやってこない理由がそれで分かる。】

* * * * *

文明の発展とは何だ? それは今我々が目にする過剰な物質文明など、環境を破壊するだけで、決して永劫に求める真の文明とは言えない。水や空気を汚し、海や空や、地下や陸上も危険物で一杯。危険なオモチャが猛スピードで動き回っている。阿修羅が跋扈する独壇場だ。

私に言わせれば真の文明とは、生命が安全に永

続できる環境を維持することだと考える。勿論、我欲の深い、ならず者の国々が、大量破壊兵器を争って開発・備蓄するなど言語道断。今地球上には、ろくでもない大国が、合わせて、全人類(全生物)を何百回も皆殺しできるだけの核兵器・大量破壊兵器を備蓄している。10個足らずの核兵器を持つて、先軍大国などどうそぶくならず者の小国と、何万発もの核兵器を備蓄し、世界の警察などとうそぶく大国とは、並び劣らぬ愚か者同士である。

文明の進化とは、破壊に向かって突進することか? 地球という宿主に対し、人類という寄生虫が、暴れ過ぎると、宿主自体を殺してしまう。致死率90%以上の最強の病原体(エボラ出血熱ウイルスなど)は、宿主を簡単に殺してしまうので、自身も子孫を残しにくくなる。

利口な病原体(寄生虫)は、宿主を生かさず殺さず、僅かの栄養を分けてもらって、子孫を絶やさぬように寄生するものだ。寄生虫にも無鉄砲な愚か者と、共存共栄をもくろむ利口者がある。

もし人類に智慧というものがあるのなら、急速に地球を破壊するような愚行は直ちに止して、スローライフで、地球から恩恵を受けつつ、子孫も安心して生存できる方法を選択するべきではない。私に言わせれば、私に言いたいのである。

* * * * *

以上のべたように、現在地球上に存在する化石燃料・鉱物資源・生物資源などは、現在生きている世代だけで、根絶やしに使い果たすなど、とんでもない話である。未来の子孫達にもこれらを享受する権利は平等に存在するはずである。

子孫達が使うべき資源は枯渇し、安全に生活す

る環境は破壊され、危険な瓦礫のみが残された日には、どうやって子孫達は生きていけばよいのか。人類は自らの手で、種の寿命を縮めるような愚かな行為は、絶対に避けなければならない。人類は折角大脳を膨らまし、時間軸の過去・現在・未来に思いをはせることのできる唯一の動物と言われるのならば、生命を維持・持続することがDNAの本性なので、これに反する行為は、正に自殺行為である。

今地球は間氷期であるが、更に産業の発展により、温暖化に拍車がかかっている。このまま温暖化ガスを排出し続けられ、両極や高山の氷河が溶け出し、海面が上昇する。過去にも海面は、100m近く何度も上下している。従って海拔の低い地帯は浸水・埋没の危機が深刻に迫っている。それだけではなく温暖化が進めば、マラリアなど熱帯病が中緯度地帯にも蔓延することになり、数えきれないほど病死者が続出することになる。

各国は経済発展至上主義の呪縛にとらわれ、緩やかな安穩の生活は、無視されている。競争原理で、過酷な労働が強いられ、精神を病む労働者が溢れかえっている。鬼の経営者は人権を無視し、国家の未来像とか、人類の将来あるべき姿など全く見えないのではなからうか。経済の発展も、冷静なコントロールを伴わなければ、取り返しのつかない悲劇を招くことになる。人間の浅智慧が、人類の種としての寿命を縮めることとなる。

それ故、化石燃料によるエネルギー依存を、再生可能エネルギーに変換する必要がある。太陽光・風力・水力・波力・地熱・バイオマス等いろいろあるが、今まで原発に頼り過ぎ、これらの自然エネルギー開発の技術が少々遅れを取った傾向

があるので、ここで本気になって、効率的な開発を進め、地球環境汚染にストップをかけなければならぬ。子孫達が安全に暮らす為には今、クリーンエネルギー開発に多大の投資が必要である。

* * * * *

このように人類は、産業革命以来変わらずか200年そこそこで、資源の枯渇や、生物の多様性を失い、更に環境破壊を招き、未来人類の安定的生存を脅かす事態を引き起こしてしまつた。借り物の大事な地球を傷だらけにしてしまつた。未来人からの預かり物という観念を再確認して、今こそ、軌道修正のきく内に、はっきり方針を定め、地球環境を正常に戻すよう、全力投球すべきである。

照子さんは逝つた

伊東弓子

「大佛照子さんを偲ぶ会」は六月九日(土曜日)の午後だった。その日は午前中から風が強くなり、大雨になった。会場は七人八人で囲むテーブルが十四、五あつて百人位の人達が集まつていた。季節の花に包まれて照子さんの遺影は優しさと聡明さに溢れていて、一番後の私にも語りかけてくれている。頂いた葉には右向きで編物をしている姿が描かれ、ページを開くと『波崎事件に纏わる手記、尖がり帽子の赤い屋根』の手記が綴られ、最後に『脱原発元年』土浦上映会の写真が載っていた。十二時から三時半頃迄五十人の人が思い出を語り、照子さんの生き方を賞賛し、生涯を紹介してくれた。その雰囲気の中で照子さんと出合った日からの事を思い出していた。

照子さんの住んでいたのは、閑居山中腹のお寺であつたがそこでお合したことは一度もない。閑居山は中学の春の遠足で行つたのが最初だった。その後あの山が気にかかった。高浜入江から西の方に閑居山は見える。恋瀬川の流れを挟んで右に龍神山が肩を並べている。その奥に四季毎に彩りをかえて筑波の山が姿良く見える。高崎の水辺に立つ時、高浜へ自転車を走らせる時、その山への関心やその山に住む人への思いが繋がっていった。冬になると志筑から竹屋さんが来た。私の実家は北側から西にかけて竹藪があつた。季節によって天候によって竹の騒ぎが異なつて気がよかつた。今のように藪が荒れ、厄介者のように扱われている竹とは違い、竹を必要とする仕事の人達が沢山いたのだった。その竹屋さんも出入りしていた一人だった。一日の竹切りが終わると「まあ一杯」とくみ交わし始める父と竹屋さん、話しも弾んでいく。そんな中で山の寺の坊さんの話が出た。「進歩的な考えの人で、どう仕様もない人らの世話をするそうだ。(障害を持った人達のこと)」地元は反対してますよ」

その話がずつと心に係つていた。思っているだけでは駄目だ、訪ねてみる事にした。施設の様なものではなかつた。大柄で年配の住所さんと小柄な奥さんがいらしたが、若い方達はおられないようだった。帰る頃には薄暗くなってランプが点つた。里から遠く山の中腹の所為か電気をなかなか引けないようだ。夜道を下りて帰る時、何度も何度も振り返つていた私だった。黒い山は歴史を包んで此処にありという姿。寺の小さな灯りはいつまでも見えて私を守ってくれているようだった。あの灯りは今でも私に何かを語り掛けてくれている様

に思う。

随分月日が経ってからの話し、障害者と住職さんの事を耳にした。当時、福祉事業に対して「公的」援助など無い時だった。個人の気持と財力など高がしている。どんなにかご苦労が多かった事だろうと思う。事が起きれば批判しその場句、潰してしまう程世間は怖い、私達にもそんな日があつた事を思い出し、一度もお合したことのない方だけれど、その苦しみがひしひしと伝わってきた日があつた。

照子さんとの出会いは高校を卒業した三月だった。「友の会」があるからという母の誘いで、母の友人で出かけた。会場は母校だったので心弾んで楽しさ一杯だった。女性達の工夫した衣、食に纏わる展示、社会の出来事を勉強した発表など女性達で賑わっていた。姿は質素な女性達、目は輝き語り合いも明るかった。母が知っている人達が私の世界を広げてくれた時だった。その時写真を撮って頂いた。その中に照子さんの姿があつた。その後母のアルバムのその写真の傍に「この人達ばかりの世の中であれば…」と記されていたのをはつきり覚えていた。農村地域で活動していた母の心の奥の叫びが聞こえたようだった。

秋、私は農繁期託児所の手伝いを始めた。講習を受けに行った先で、照子さんと一緒になった。千代田村の農繁期託児所の手伝いをしていらした人との繋がり不思議さを感じた。良縁を積み重ねていこうという業を新めて思った。再開の喜びだけで照子さんのことは何も知らなかった。その後、無認可保育所の講習会でも何度かお話し、度重なる中にお互いの仕事の状況や個人的な話しも進む中で、あの山の寺の奥さんであることを知

った。大きな山とあの灯のもとに、この方がおられることが更に嬉しさを増した。

その後は家と仕事の往復に精一杯で、ご無沙汰をしてしまった。仕事での葛藤、子供の事、他諸々の辛さから逃げたくて、あの山と灯と照子さんに何かを求めて出かけた事があつた。山を上る道沿いに小さな家が五、六軒あつたが、住む人もなく蔦が絡んで草々が生い茂っていた。ご主人が苦勞して進めてきた施設の一つ一つだと思う。止めざるをえなかつたのか、老任職は亡くなられたか、照子さんご夫婦やお子さん達はと気になったが、悲しみが強く本堂にも庫裏にも尋ねる事なく、磨崖仏の座主道を登つた。地を這うように竜胆が咲いていた。私の苦勞など問題ではない。もうひと踏ん張りしなければと決心し、木の葉の笑い合う声を背に受けて、現実へと帰ってきた日があつた。どうしたかも確かめず逃げ去るように帰ってきた事に心が咎めて、日をおかず尋ねた事があつた。人の気配はなかつたが本堂もきちんとしていたし、庫裏からも生活している様子が分かつた。良かった。と胸が熱くなつた。賽銭箱の傍に綴帳があつて詣つた人のある事も分かる。頑張つて欲しいと願つて名を入れた。

この頃、息子さんは寺再興の為努力していた頃だったと後で分かつた。照子さんに合えなかつた事がとても気になつた。

一生懸命とは必ず通じるのか、新めて感じる出来事があつた。農協に努めている人にも納金が遅れる事を詫びる話から、その人の実家が千代田村で、お山の事、そして照子さんの話しを聞く機会があつた。実家のお宅は寺の相談役の方で私の事を信用してくださつて居場所を教えてください

2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。
魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。
どうぞよろしくお願ひいたします。

- 7月15日 ホルヘ・ルイス・サモラ
- 9月9日 里山と風の音コンサート
- 9月30日 高野行進 jazz live
- 10月6日 谷島崇徳・谷島あかねギターとピアノデュオ

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。

オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465
Tel0299-55-4411

った事を本当に有難く思い感謝し忘れられない。

それは今から三十年前だった。あの山と環境の違う住宅暮らしをしておられる事が分かったので、薄芒や野菊をもって出かけた。(次の日はお月見だったので)お元氣だったのに安心し再会を喜び合った。知人はいなくても自宅の人やその子供達がいれば、楽しい毎日だそう。ご苦労話も沢山あったが、今少しでも人のお役に立てる事があるのは生甲斐との事だった。波崎事件の話から人間の作り出す恐ろしい仕掛け、そこから起きる悲惨な出来事の数々新めて知り、身近かにも沢山ある話など尽きなかった。土浦の市議会議員の選挙にも共通の知り合いの人の為に応援に行ったりした。

嬉しいお知らせをする出来事があった。石岡に近い所で托鉢をする若いお坊さんに合ったことがある。息子さんと直感した。志を差し上げて尋ねると、やはりそうだった。

「お母さんはお元氣ですよ。頑張つて欲しいと願つておられますよ」

「ありがとうございます」
という後姿を見送った。この事をすぐお知らせしたところ、涙ぐみながら、
「頑張っているんですね。これからも見守つてやつてね」

と母親の気持ちを聞かせてくださった。又入院中に娘が部屋をきれいにしてくれたのはいいが大半捨てられちゃったと愚痴を言う人間らしさを耳にした。悲しかったけど自分で思い切れないのだから、これも一つの方法よねと淋しい笑いをしておられた。

この冬は一段と寒く、お合する期を失っていた。娘が照子さんの亡くなられた事を知らせてくれた。

数少ない名字だから間違いないという。半信半疑で確かめた日の辛さ、力が体から脱けていくようだった。お釈迦さまのお生まれになった一日前の四月七日に旅立たれた。

母が「この人達ばかりの世の中であれば…」のひとこと。まさにその通りの人だったと母に墓前に報告した。

私は照子さんから人を大切にすることを、形に表すことを教えて頂いた。

ご主人と共に歩まれて、静かな中に反権力、反障害、反差別の精神を貫かれた力を受け取らせていた。梅雨の前の雨の町に出た。雨は降り続いていた。

苺萱(さくら) 姫物語

小林幸枝

六月公演が無事終了した。

今回の苺萱姫物語は、今までとは全く違う感覚で演じることが出来たと思つている。苺萱姫物語は、モダンバレエの柏木さんから、白井先生に伊藤道郎のためにホルストが作曲した曲があるということから始まった。

私は、ホルストの曲と知らされても、その曲が聞こえるわけではないので、曲から物語をイメージすることが出来ません。台本が出来上がり、その文書から自分のイメージを組み立てていきます。ホルストの日本組曲をテーマに置いて、将門の伝説を舞にしようと言われた時には何だかよくわかりませんでした。美浦村に伝わる苺萱姫物語を基本にして、将門の世の中に対する思いの心と苺

萱姫の将門に対する思いの心を舞に表現する台本をもらった時、今までとは違ったイメージで舞うことが出来る予感がした。

今回は、いつも音楽を担当して下さっているオカリナの野口さんが、CDの作成で参加が難しく、替わってピアノの山本光さんが担当して下さいました。私は将門をコンガのリズムで舞い、柏木さんはホルストの日本組曲に用いられた江戸子守唄、道成寺等を中心にピアノ演奏をバックに苺萱姫を舞った。

私は能の動きをイメージした手話の舞を創造し、ピアノ演奏で柏木さんが苺萱姫の心をモダンダンスに創造して下さいました。友人や小学校時代の寮母さん、また高校時代の先生からはすごい迫力を感じましたとお褒めの言葉を頂きました。今回の舞台は、私にも満足の出来る舞が創造できたと思つています。ただ、白井先生はまだ満足して頂けなく、厳しい評価をもらいました。しかし、良い感じで進歩してきていると言われ、少し安心しました。そして、全体としてはとてもいい感じに仕上がっていましたと言われました。

今回公演の舞の部分を中心としたショートバージョンを、8月にマカオで公演することになっていましたが、残念なことに会場の問題などで中止になってしまいました。白井先生には、海外、特に中国等との提携の公演は、なかなかうまく進める事が難しく開いてみなければわからないことが多く、変な形で公演するよりは中止になった方が良くと言われました。本当に残念な気持ちですが、何でも一歩一歩確実に進む事しかありません。

そのかわりというのも変ですが、一昨年より言われていましたNHKの放送取材が急遽決まり、

公演後すぐに朗読手話舞として紹介、放送して頂きました。

今、白井先生は東京公演に向けての準備・企画を始めておられるので、何処かできっと実現できるだろうと思っています。公演が終わる前に、白井先生に十二月公演は何をしますかと聞いたら、六月の公演も終わっていないのに何を言ってる、と言われた。しかし、公演が終わった今、気持ちはまだ十二月公演に向いています。

十二月公演でも柏木さんは、伊藤道郎作品を舞われるそうですから、それも今から楽しみにしています。柏木さんからはもつともつと吸収させていただき、早く朗読手話舞を完成させたいと思っています。

応援よろしくお願いいたします。

古代復元広場

兼平ちえい

当会報先月号(七十三号)でお伝えしました常陸風土記の丘内の、有料エリアには石岡市内で発掘された埋蔵文化財の展示室の他、古代復元広場として鹿の子史跡公園が整備されています。それは、ご一緒に古代復元広場から見学して行きましよう。

資料室出口の扉が開くと、竜神山を背景に茅葺きの古代家屋が立ち並ぶ。出口を出ると足元に市内三村地区から運ばれた三村地蔵窪貝塚が広がる。六千年(縄文早期)前の貝とは思えない程に原形をとどめている。昭和三十年の調査でハマグリ、アサリ等貝類は二十三種類出土している。シカ、イ

ノシシ、タヌキ等の哺乳類と爬虫類のカメの骨(魚の骨は少なかった)も見つかっている。また竹で突き刺した文様や沈線の文様の付けられた土器も出土し、当時、この型式の土器が出土する遺跡は少なかったので貴重な発見であったそうである。縄文時代の季節ごとに得られる、山の幸、海の幸を利用しての自然との心豊かな暮らしが目の前に広がる。間もなく約一万年前の堅穴式縄文住居として四千年前の縄文住居が立ち並ぶ。約一万年前の日本列島は少しずつ暖かくなり大地はシイなどの照葉樹におおわれ、土器や石器などの道具が発明され、食料の確保や加工が楽になり、豊かな縄文時代の生活が窺える。因みに四千年前の縄文住居は当地、宮平遺跡から発見された住居跡をモデルに復元されたものだそうである。

一万年前の復元縄文住居内にはその時代の男女の人形が迎えてくれる。特に小学生(四月、五月、六月は県内の小学六年生の見学がとて多くなります)の皆さんは「怖い!」の悲鳴やら、「リアルで感動した!」と賑やかな見学の場になるところである。

次は昨年の三・一一の地震で傾いてしまつて改修された真新しい茅葺きに包まれた約二千三百年前の弥生時代の住居である。この時代には大陸や朝鮮半島から稲作の伝来や鉄器、青銅器がもたらされた。

稲作の始まりは、貧富の差を誕生させ稲作を行う為の土地や人々を獲得する為に激しい争いも生じさせた。弥生時代は「米と金属の世紀」とも言われている。当地宮平遺跡からの弥生時代の遺構は住居跡が八件、北東隅から発見されたそうである。この復元された弥生住居にも弥生人の男女のモデルがいるが見学の六年生の皆さんが落ち着い

て、楽しく見学している様子を胸をなでおろす。

次に奈良・平安時代の住居として、現存する最も古い民家で、兵庫県の箱木家の間取りをモデルにした住居が建築されている。家屋内に入ると柱の多いのに驚く。この兵庫県の箱木家に関して、私は、平成十七年五月に箱木家に伺った。そこには十四世紀頃に建てられたと考えられている母屋と江戸時代中期に改築された離れが迎えてくれた。ところが母屋の茅葺きの屋根は私の身長(一六一)ほどに下がっていた。まるで縄文住居の屋根を私の身長程に持ち上げた感じである。

箱木家の古文書によれば平安初期の八〇六年(大同元年)に建てられたと記録にある為「千年家」と呼ばれているが(どんと)ダム建設の際、昭和五二年から二年がかりの移築の際の解体調査で十四世紀頃の我が国最古の民家である「母屋」と江戸時代中期に改築した「離れ」を江戸時代末期の一つの棟に収めたものであることが判明したそうである。

当風土記の丘に復元されている箱木家のモデルは屋根が高い(私の身長に階位)が、もしかすると、私の身長ほどに下がっていたのかもしれない。そうだとすれば沢山の柱がある事に納得できるのである。

続いて鎌倉時代の復元家屋は頂までの高さが八・九m、軒下までの高さは三・一mの茅葺きの民家である。屋内にはドジョウ樽(ドジョウ釜とも言う)や、ウナギ樽、鮎樽などの漁具や蓑や蓑笠、懐かしい囲炉裏や竈も見える。

最後は江戸時代後期の建物を復元した直屋と曲屋の二棟である。冬の寒さの厳しい地方、岩手県南部や茨城県に多く見られる曲屋(労働力に重要な

牛・馬が突出した馬屋と呼ばれる部分に飼われていた)や比較的暖かい県南地方に多い直屋(馬屋は屋内の土間にある)には機織り機や火鉢、行燈、ランプ、長持、等等昭和の中頃まで使われていた、皆さんから寄贈された沢山の民具が置かれてある。尚、二棟のうち曲屋は蕎麦作りや愛染め等色々の催事に現在利用されている。そして見学に疲れ果ててしまった小学生の皆さん方はこの場所で俄然元気が戻る。それは火おこしの体験や竹馬遊びにある。以上で古代復元広場の見学は終了となります。次回は同じ敷地内にあります鹿の子史跡公園をご案内します。

(参考資料「石岡の遺跡」 石岡市教育委員会)

・笑顔のスカシユリ 子らのえがおに似て ちえこ

(常陸風土記の丘にて 六月二八日)

《特別企画》

虚構と真実の谷間

第四章 霧の中の栄光(2・4)

打田昇三

「前九年の役」とセットのように思われている「後三年の役」は勿論、東北地方を舞台に行われた合戦である。大掾氏や桓武平氏が出る幕では無い！とお叱りを受けそうであるが、一般に伝えられる「後三年の役」では源氏の本流を継いだ八幡太郎義家の活躍にスポットが当たり、大掾氏や桓武平氏のことカットされている。その為に何となく話が出来過ぎていて単純な清原一族の内

紛に見られ勝ちなのである。確かに相継争いの要素はあっても、その根底には「桓武平氏」という一つの権威を巡る当事者の思惑があり、それが争いの原点になっている。真実を隠すことは「嘘」を正当化することになるので、此処は逆転の発想で桓武平氏を担ぎ出すことにする。

前九年の役から二十年が過ぎた奥羽地方では、戦功により鎮守府將軍に任命された清原武則の系統が氏族の長として役職を継承し、奥州一の豪族に押し上がった。他の豪族がそうであったように、一族の連合体で運用されていた内部統制が惣領制に変わり、族長の権限が強化されて主君第一とする源氏や平家のような武士団に似た体制に変えられた。これは当然のことかも知れないが、中央から圧迫され続けた東北地方の人々が一致団結する必要から生じた連合制に慣れた支族諸流の有力者たちにとっては納得し難いものがあつた。

後三年の役が起ころ頃、清原武則は既に高齢で引退し、嫡男の武貞から、其の子の真衡(まさひら)へと統領の座が移譲されていた。この真衡には子が無かつた。従来であれば一族の若者が養子に入つて跡目を相続するのだが、清原一族でも主筋の清原家は鎮守府將軍であるから、かつて浮囚の長であつた清原からは養子を取れない：つまり宗家(そうけ)の敷居を無理に高くしたので殿様蛙が赤蛙、青蛙、雨蛙を馬鹿にするような感覚で養子選びをした。その結果、成衡(しげひら)と言う若者が清原氏のトップに納まったのである。この成衡は清原一族とは全く関係の無い人物であつた。では、何処から迎えられたのか…。

常陸国に桓武平氏高望流(国香系)を伝えたのは平繁盛であるが繁盛には何人かの男子が居り、

嫡男の維幹は父祖の官位である常陸国府の大掾(判官職)を継ぎ、その子孫が職名を名字としたことは知られている。大掾系図などによれば次男の維茂が信濃守に、三男の安忠が出羽守に、そして四男の兼忠は上総介に補されている。このうち安忠は大掾系図にサービスで出羽守としてあるが、実際には国司ではなく副知事格の権守(ごんのかみ)であり、福島県のいわき地方に土着して「海道平氏」と呼ばれた。現在のいわき市は昭和四十四年に「平、内郷、常磐、磐城、勿来」の五市と「四倉、久之浜、小川、遠野」の五町及び近隣五か村が合併したのだが、その領域が関ヶ原合戦で失敗して徳川家康に没収された旧・岩城氏の領地だとすれば、岩城氏は海道平氏を祖先と称していたから「平市(たいらし)」が有つたことと併せて出羽に赴任した平安忠の子孫が海道平氏であつたことは「嘘」ではなくなる。つまり桓武平氏・国香の子孫が「いわき地方」に居たのである。くどい言い回しをしたが、清原真衡の養子として迎えられた成衡は海道平氏であり「海道小太郎」という名で呼ばれる若武者であつた。

清原家を継ぐ養子が桓武平氏ならば言うことはない。真衡は満足したのだが、その分だけ一族の者が不満を持ち始めたことは当然である。それだけでなくも清原真衡には複雑な関係を持つ弟が二人もいた。そのことは暫く措くとして養子の成衡は独身であつたから、取り敢えずは然るべき花嫁を探さなくてはならない。これも従来の清原氏であれば一族の娘たちを篩(ふるい)にかけて選べば良かったのだが、自ら格上げをした清原家に迎えた桓武平氏の流れを汲む婿さんに合う花嫁の条件と言えは最優先で家柄になる。近辺に土着してい

る藤原氏が古くは坂上田村麻呂の末裔でも選ばれない。あれこれ探しても候補者は居なかった。

そう言った折に隣国・常陸で格好の女性が見つかったように大方の史書が書いているが、この説は「嘘」とは言えないまでも不自然である。多分、清原氏のルートでは探せないで、桓武平氏の繋がりを利用して成衡の実家・海道平氏が縁談を進めたのだと思う。相手は多気大掾・平致幹の孫娘で、父親は源頼義將軍ということになっている。

前太平記では二十二歳になったと書いてあるが、それだと將軍の行動に少し合わない点があるけれども、深く追及しないことにして、兎に角、永保三年（一〇八三）の春から初夏にかけてと思われる頃に、清原、大掾（平）両家の婚義が行われることになった。結婚式場が未だ無かったので婚礼から披露宴まで全て清原邸が会場になる。その頃、清原真衡の館は平泉と胆沢城との中間地点である豊田に置かれていたらしいが、金沢柵（陸奥横手）にも別邸らしきものが在ったと思われる。結婚披露宴が何処で行われたのか不明だが、ともかく、清原一族には「準備万端怠りなくせよ」という当主・真衡の指示が伝達された。近年は会費制の結婚披露宴もあるようだが、この場合は当家からあれこれと作業を命じられた上に「沢山の御祝を持って集まって来い」という命令である。長老組を始めとして一族の心中は穏やかでは無いが、逆らえば反逆にされるので我慢をして集まって来た。その中の一人に、前九年の役では第三陣の將として活躍した吉彦秀武が居た。此の人は真衡の叔父でもあり、有力な身内でもあった。青森県史によると、清原氏の本来は在地豪族で吉彦（吉美古）が本姓であり、秋田城介として赴任してきた清原

一族との婚姻を通じて清原姓を称したらしいから、最も大切にされるべき家筋であり、また秀武は功績のある長老でもあるから、其れなりの礼を以て遇せられるべきところ、一般の家臣と同じ扱いを受けており心中に怒りを覚えながらも我慢をして出てきた。言われた通りに酒、肴など祝いの品々を馬に積み、お祝の札束に相当する金（砂金か？）を朱色の盤にうず高く積んで、それを自分で持ち、当主・真衡が居る部屋の前庭に回った。

札束も勿論だが、金銀寶石類などは見たことも無いから重さがどのくらいあるかは分かりようが無いが、綿の五十kgと鉄の五十kgでは、どちらが重いかなどとクイズ紛いに聞かれれば、誰でも「鉄」と答えるように盛られた金はかなり重い。

それを捧げ持つて庭先に行つたのであるから座敷に居て気がつかない訳は無いのだが、真衡は来客の僧と囲碁を打っていた。或いは気付いても權威をひけらかして無視したのか、声もかけず振り向きもしない。砂金は献上品であるから、一応は目よりも高く捧げていたので重い。暫くは辛抱していたが年金暮らしの年齢で力は弱っている。疲労と同時に自分に対する真衡の無礼な仕打ちに腹が立ってきた。人間には胃袋の他に堪忍袋があるらしいが、この場合の吉彦秀武には「その破りどきが来た」と感じられた一瞬である。これが日本の歴史に「後三年の役」という出来事を齎した発端であり、バカバカしいが「嘘」ではない。偶々、清原氏の直系に生まれただけで何の功績も無い成り上がりの若造めが無礼な態度をとりおつて！ブチ切れた秀武オジさんは、捧げていた砂金の山を庭にブチ撒けた。勿体ない、そのまま家に持って帰れば良いのに……と思うのは貧乏人の考えで、秀

武は持参した酒、肴などを付けてきた家来に与え「ゴミの持ち帰り」は未だ徹底していなかったから、その容器類を真衡の屋敷の門前にばらまかせた。さらに自分も鎧・兜を身に付け、家臣にも武装をさせてから、堂々と自分の館に帰ってしまった。館は金沢柵からだど二十kmほど北の仙北六郷付近に在ったと推定されている。なお六郷は佐竹氏の後に最初に府中（石岡）藩主となった六郷氏（藤原系二階堂氏）の故地でもある。

大量の砂金が目の前の庭に撒かれたのにも気づかず囲碁に熱中していた清原真衡が「今日の太陽は光り方が普通ではない……」と思つたのは、暫く経つてからである。傲慢にも庭に平伏していた叔父に言葉もかけず放置して、客の僧侶が御祝義代わりに嘘負けしてくれた囲碁の勝負がついてから姿が見えないことを咎めた。家臣を呼び「吉彦はどうした！」と聞かれた家臣は「早くからお待ちでしたが、殿がお言葉をかけられなかったので大変に御立腹で……」と、金の雨を降らせ料理を食い逃げした経緯を正確に報告した。普通ならば悪いことをしてしまった……と反省し、急いで砂金を拾わせるのであろうが、自分の地位に目が眩んでいた真衡は反省どころか「来ているとは」我夢にも知らず……と、「嘘」をついて（前太平記）吉彦の怒りを主君への反逆と受け止め、直ちに追討の軍勢を集めさせた。傲慢の成せる仕業である。

一方、この情報を掴んだ吉彦秀武の方でも防戦の準備をしなければならぬが、砂金は捨ててきたし、兵力も足りない。相手は鎮守府將軍と押領使の立場を利用して東北全土の軍勢を動員できる立場にある。何とかしなければ……そこで思いついたのが真衡の弟二人を味方につけることである。

弟と言っても家臣と同じように扱われているし、この三兄弟は複雑な関係にある。

前九年の役に際して、阿倍頼時の娘を妻としていた藤原経清は官軍として出陣したが、義兄の平永衡が猜疑心の強い源頼義に斬られたことから義父の陣営に走り、敗戦で頼義に虐殺された。未亡人は子連れで清原武貞に嫁がされ家衡を生んだ。幼なかつた連れ子は清原氏の子として育てられ、清原清衡と名乗った。清原氏の家督は嫡男の真衡が相続して一族家長の権限を強化したから、親族とは言っても二人の弟は吉彦秀武に似たような立場に置かれていたので秀武の誘いに乗った。

真衡が吉彦館に攻め込んでくることを予想した秀武は二人に対して真衡が出羽国に攻め込む留守の間に本拠地を衝くよう申し入れた。これに従った清衡・家衡兄弟は「殿様蛙が怖くては田圃(たんぼ)に出られぬ」と勇み立ち、手持ちの軍勢を率いて豊田に攻め込むことにした。秀武の案は「豊田の真衡館を急襲して妻子を討ち取り、館を焼き払う」ということであつたが、清衡らは攻め寄せた先で自主性を発揮し、先ず白鳥村という四百戸ほどの集落を焼いた。此処は清原真衡の台所のような村なので損失は大きかつたが館と家族のほうは無事であつた。異変を聞いた真衡が急遽、引き返してくるというので二人の弟が館襲撃を見合わせていたからである。こうして四匹の蛙が野心含みで睨み合う形のまま初秋になると清原氏の同族争いである「後三年の役」を豪華に脚色する人物が陸奥守に任命されてやつてきた。

前九年の役が終息した際に出羽守の内示を受けた源義家は、それを不満として配置替えを望んだことは既に述べた。それから二十一年、今度は陸

奥守に兼ねて鎮守府將軍に任命されての赴任である」と「日本外史」「前太平記」及び古い「岩手県史」などが伝えている。しかし、この説には疑問が生じる。鎮守府將軍としての権威をバックに奥州に君臨して一族を家臣並みに扱ってきた清原本流の傲慢ぶりから「後三年の役」が生じたのであるから義家は単に陸奥守として来たのであり、丁度、良い具合に清原一族が戦っていたので、それを平定するために「鎮守府將軍」の職を手にした：と解するのが妥当ではないか：これは私が「嘘」をついているのではなく、近年に書かれた史書では大部分が「源義家が陸奥守となつて赴任してきた」と表記している。

国司は先ず多賀城の国府庁舎に入る。その時に清原一族は睨み合いの状態にあつたが、当主の真衡は吉彦秀武を討つために出羽に出陣する予定を変えて国司様を接待した。その場所が国府なのか清原館なのか曖昧だが「三日厨(みっかぐりや)」と言って豪華な接待を繰り広げた。御馳走は言うに及ばず、日ごとに上等の馬五十頭、海豹の皮、絹織物、鷹の羽(矢に使う)などの珍しい贈り物が並べられた。その後真衡は吉彦秀武を攻めるため出羽国へ向かつたのであるから忙しい。それが原因かどうか、途中で病死してしまう。

館のほうは養子の成衡が留守を預かり、家衡・清衡の軍勢を防ぐことになるのだが、合戦には慣れていないから指揮も危なかつた。丁度、其の時に義家の家臣で兵藤正経、伴助兼の両名が近くに来ていたので(郡内の検閲と言われるが、その辺の事情が怪しい)真衡の夫人が使者を以て事情を話し「：館に兵士もおりますが女の身にて將軍の器にあらざれば敵を防ぐことも叶わず、ぜひ、

柵内にお入り頂いて合戦の様子を(攻めてきた敵軍が悪いということ)国司様に申し上げて下さい」と頼んだ。両名は形式的に「殿の御命令が無いと：」と断つてから「と」「前太平記」は教科書的に記述しているが、どうも「嘘」のようで、源氏は最初からこの争いに介入する意図があつたように思われる。「日本外史」は少し正直に「：義家、兵を従へて其の城に入り、拒ぎ(ふせぎ)て之を卻(しりぞ)く：」と、直接的に書いてある。

清原真衡の養子となつた平成衡の新妻は、源義家の異母妹になる訳であるから妙な細工をしなくても素直に「援けに行くぞ！」と宣言すれば敵軍は畏れて退いたと思われのだが：事実、義家が相手と知つた家衡と清衡は逃げ出した。尤も最初のうち義家が未だ来ない時の合戦では源氏の家来二人が指揮しても城方は苦戦をしたらしい。結局、真衡が病死したことを知つた家衡と清衡とは降伏してきた。この場合、清衡に従っていた親族一人が「源氏は信用出来ない」として戦いを挑み負けてしまった。清衡は「彼が勝手に攻めた」ことにして上手く言い逃れをした。嘘つき！

その後、清衡は陸奥国司である義家に逆らう理由も無いことに気付いて恭順の意を表したので、義家は清原氏の所領である奥六郡を二分して家衡と清衡とに支配させた。清原の主であつた真衡の領地は認められなかつたことになる。そうなる養子の成衡は居場所が無くなる。義家の妹婿でありながら、この人は消息が分からなくなっているのだが、辛うじて源義家が保護して、どういふ関係だか下野国的那須の與一の実家に近い辺りに住まわせた：と岩手県史が伝えている。ただ暫くして殺されたらしいから、保護して貰わない方が良

かつたかも知れない。源義家が将来を見越して「桓武平氏」を消したのかどうかは分からない。

そうなる常陸大掾(平)系から嫁いで来たばかりの新妻も行方不明：合戦の巻き添えを喰ったかもしれないが、筑波山麓に居れば無事だったのに：合戦の口火を切ったような吉彦秀武は、喧嘩相手の真衡が病死してしまったので、義家に服従し各地で戦ったらしい。真衡の館の庭に撒き散らした砂金は回収できなかったようである。一件落着のように見えた清原家の争いは、やがて複雑な人間関係を背景にして、それぞれの欲望をむき出しにして新たな段階を迎える。

源義家が陸奥守となつて丸三年目の應徳三年、義家の裁量で領地を配分して貰った清原家衡が次第に不満をつのらせたのである。清衡が義家に近づくことに警戒心を抱いたのかもしれない。二人が配分して貰った領地は、かつて安倍頼時が本拠地としていた「奥六郡」と呼ばれる区域である。人間の欲にはキリが無い。兄のワンマン真衡が生きていれば奥六郡どころか奥の六畳一間も貰えないで家来にされていたのに：清原武貞を実父とする家衡は次のように考えたのである。

「兄の清衡は、再嫁させられた母(安倍頼時の娘)の連れ子として清原一族になったのであるから清原の財産を公平に貰う資格はない。それなのに陸奥守(源義家)は奥六郡を二分して胆沢、和賀、江刺三郡を清衡に与えた。此の地域は北上川の流域が肥沃であるのに、自分は岩手、志和、稗抜の三郡しか相続出来なかつたから、平野部が少なく、これは石川啄木に聞いて貰っても分かる。この様に清衡が優遇されるのは陸奥守にゴマを搦るからで、その為に清原の嫡流になつた自分が冷遇され

るのであり、これは不当である：」と。

周りの者が、岩手郡には将来は奥都・盛岡が置かれ、また東北新幹線も通るから：と説明しても納得しない。第三者が観察すれば元来、奥六郡は阿倍氏の領地であるから、その血を引く清衡にも貰う資格が有る筈で弁護士に相談すれば良かったのだが、面倒だと思つたか弁護士料金を惜しんだのか家衡は手取り早く清衡を消すことにした。まず、時代劇では常連の忍者が清衡を襲つてみたけれども、忍者も未だ未熟な時代であつたから見事に失敗をして役に立たない。そこで自分が手を下すことにして、密かに予行演習を続けた。

ある日のこと、極めて危ない決心をした家衡は、現在の岩手県奥州市に在つた清原清衡の館を訪れ珍しく泊まつた。それとは知らず、何となくギクシヤクとしていた弟が訪ねてきたので清衡は心を許し、家族総出で弟を歓待した。家衡は愛想笑いと「嘘」とで兄の家族を油断させた。その夜に清衡の館は各所から火が出て清衡が気付いた時には周りが既に火の海であつた。妻子の安否を確かめることも出来ず何処をどう逃げたか、煤だらけになつて草原に転げ込んだ清衡が見たのは、松明(たいまつ)を翳した兵たちを指揮して、館から逃れ出る清衡の家臣たちを殺害している家衡の鬼畜のような姿であつた。このとき清衡の妻子は既に殺害されていた。ようやく事態を察した清衡は、逃れ行く当てもなく家衡に味方する同族の所在も確認できないので背に腹は代えられず国司の義家に訴えた。清衡と家衡とを抑えて、奥州に君臨しようとした源義家の目論見は予期せぬ方向に逸れてしまつたが、折角、手にした鎮守府將軍の見せ場が転げ込んできたので義家は清原清衡を保護し、

直ちに家衡を追討する数千騎の軍勢を揃えた。時節は既に應徳三年の冬に近かつた。清衡は役に立たないとしても吉彦秀武も居ることだし源氏の兵力を以てすれば、其れまでは冷や飯食いでいた家衡の軍勢など簡単に敗れる：と誰もが思つたけれども沼柵(ぬまのさく)横手市西方十数kmの旧・雄物川町)に立て籠つた家衡軍は以外に強く、押し寄せた義家の軍勢は寒さに震えているだけで何も出来ない。その上に食糧も不足していたから、幾ら義家が張り切つてもどうにもならず、多くの戦死者と共に凍死者が出て、一旦は兵を退くことにした。しかし「敗走した」と言われるのが嫌で「涙を飲んで引き上げた」と言い換えたらしいが、何を飲もうと結果にはないのである。人間は素直でなくてはいけない。この時に、家衡軍は柵の中から逃げて行く源氏の軍勢(と、言うよりも遭難した登山客の集団のような行列)を黙つて見ていた。「直ちに追撃すべし」とする意見もあつたのだが「八幡太郎」と言う名前に騙されて「何か作戦があるのでは：」と警戒して追つ手の軍勢を出さず「螢の光」の曲こそ流さなかつたけれども静かに見送つた。これが清原氏滅亡につながる失敗であつた。「八幡太郎」と言う名は父親の源頼義が源氏の氏神である八幡宮にお参りして授かつた子に付けただけの名前であつて、特にご利益も神通力も無い。清原軍はその名前の「嘘」に遠慮した。尤も清原家衡も兄・清衡の家族を騙して虐殺しているから、八幡様でもお稲荷さんでも悪人を守つてはくれない。

その頃に家衡には叔父に当る清原武衡が多くの軍勢を引き連れ沼柵にやつてきて「よくぞ、八幡太郎をやつつけた：我ら一門の誇りである：」と

褒めてから味方についてくれた。この人は源氏の野心を見抜いていたのかも知れない。そして少し北に寄るが、沼柵よりは横手市近くに在ったと言われ清原氏の本拠となっていた金沢の柵に移るように勧めた。ここは奥羽山脈真昼山地を背負う要害の地である。攻める義家軍は兵員を補充するにしても糧食を確保するにしても陸奥国府が基地であるから奥羽山脈を越えて行動することになる。季節は良い塩梅に冬に入っていくので、どう考え

ても暖かくはならない。余所者は不利になる。源義家は、一旦は陸奥国府まで引き上げて来たけれども、金沢柵に立て籠った清原家衡、武衡たちを此の俣にして置けば陸奥守兼鎮守府將軍としての名前に傷がつく。何とかして潰さなければ……。思い悩んでいたが手持ちの兵力には限りがある。朝廷に対して討伐に必要な軍勢の派遣を要請したのだが、別に「浮囚の反乱」でもなく、清原一族の家督相続に関わる御家騒動であるから、陸奥国司たる義家が出しやばることさえ苦々しく思っている。援軍どころか応援の野次馬さえ出していないので、援軍どころか応援の野次馬さえ出していない。昔、何処かの国にあった「辞めない総理大臣を抱えて悩む与党」のようなジレンマが暫く続いていたのである。

その頃に、都で左兵衛尉(さひょうえのじょう)と言う御所内内裏周辺警護の下級将校として勤務していたのが、義家の六歳下の弟、源義光である。母親は義家と同じ平直方の娘であるから桓武平氏の血も引いている。兄が八幡宮から名前を貰ったのに対し、この人は比叡山三井寺園城寺の鎮守神である「新羅明神(しんらみょうじん)祭神・素戔鳴尊」の社殿で元服し「新羅三郎」と名乗った。常陸国の佐竹氏、甲斐国の武田氏らの祖である。

弓術に優れ、また笛の名手とも伝えられている。都に居て「兄が苦戦している」というマスコミの報道が伝わる度に周りから興味本位で見られるのでウンザリしていた。武士であるから「俺が傍に居れば」と言う思いが募ってくる。天皇のガードマンという仕事が仕事だけに退職願いも中小企業のように電話一本で済ます訳にもいかず、上司に相談をしたところ、心情が理解されて願いの趣きが当代の堀河天皇の耳に達した。

しかしながら、この天皇が八歳で即位して一年しか経っておらず、先代の白河上皇が「院政」を始めたばかりである。天皇が理解してくれても許可権は上皇が握っていた。以後、白河上皇は四十年以上に亘り院政を続け、中下級官僚や源平武士団を登用して日本の中世を開いたようなものであるが、その反面で浄土信仰に深く帰依したと言われている。それで無くても奥州に於ける源義家の紛争介入は疑惑の目で見られていたから「源義光が御所の警備を辞めて兄の応援に戦場へ行く」などという退職願が許可される筈がない。史書には、単純に「願いが許されず」と書かれているが別に朝廷側は意地悪で退職を認めなかった訳ではなく白河上皇の信仰心と、東北の紛争が正規の合戦とは認められなかったことが理由になっている。

源義光は畏れ多いが白河上皇の許にお目通りを願って事情と真情を以て嘆願をしたけれども許されなかったのである。しかし放って置けば兄の立場は益々悪くなる。そうした中で寛治元年(一〇八七)二月下旬の有る夜、いわゆる天皇の御座所の中衛を任務とする義光は宿直巡回をしながら陸奥国方面の夜空に目を向けていた。自分が撒いた種とは言え、あの星の下で兄貴が苦勞をしていると

思うと我慢が出来なくなって急に職場放棄を思い付いた——と前太平記などは書いているが「嘘」である。宿所では既に数人の家来が旅の支度をして待っていた。さらに二十人ばかりの郎党を連れて都を逃れた一行は陸奥国へと下ってきた。

なお嘘ついでに触れておくと、この脱走事件が起きた年を寛治五年としている史料が多い。五年の年代差に何かインチキが隠されているように思うのだが残念ながら見つけられなかった。その仇打ちでは無いが、この新羅三郎義光という武士のことを「極悪人」と決めつけている史書があるので余計なことだが触れておく。頼山陽の日本外史でも記録しているから「嘘」では無いと思われる。

源義家には六人の男子が居たようであるが長男は早逝し、後継者となる次男・義親は對馬守在任中に事件を起こして誅された。その遺児が為義であり、祖父の義家が子として育てて源氏の嫡流を継がせた。これが頼朝の祖父である。三男の義国は元気が良すぎて公卿と喧嘩し北関東に隠れて新田氏・足利氏の祖となった。そこで四男の義忠が源氏の正系を継ぐことになった。官位は従五位下で上国の国司級であるが検非違使も務め、右兵衛府の次官として天皇・上皇の身近に仕えていた。

これを妬んだのが叔父の新羅三郎義光である。自分分は宮中警護の責任者でありながら当直勤務をすっぱかして東北の方へ兄貴の応援に行つたのであるから本来は出世街道どころか裏通りも威張っては通れないのだが、それでも後三年の役から戻って復職が叶い、常陸介として石岡にも勤務した。義光はやがて常陸太田に来て佐竹氏の基礎を築くのであるが、それは石岡で勤務した際に部下の大掾氏と知り合い、その協力が得られたからである

う。出来過ぎるほどの出世のだが、甥の義忠が中央の頭官を歴任して源氏の嫡流を継いだことを妬んだ。そして卑劣にも全てを他の者に委ねて義忠を殺害させ、さらに秘密を握る者たちを残酷な手段で次々と消させた。挙句の果てには自分の兄の義綱が犯人であるというデマを流して一家を滅ぼさせたのである。この行為は単なる「嘘」では済まされず、悪辣（あくらつ）で巧妙に仕掛けられた陰謀である。この事件の最終的な被害者となった源義綱の系統は美濃国に根を下ろし「美濃源氏」を称していたらしいが全滅させられた。

殺し合いは源氏のお家芸であるが、義光の行動は異常の上限を越える狂気の沙汰である。なぜ、其処までしたのか：狙われた源義綱は、賀茂次郎と称し義家らと同じく母親は平直方の娘である。かなりの人物だったようで諸国の国司を歴任し、常陸介として石岡にも居たので顔見知りか居るかも知れない。無実の罪で消されたから有名では無いが美濃源氏の祖であり、官位は兄を越えて従四位上に至った。兄の義家とは不和ではなかったのだが後三年の役の後に、お互いの家来が河内(大阪)で領地の争いを起こしたことで合戦騒ぎがマスコミに流れた。驚いた政府が双方の動きを法で規制したりした。その数年後に義綱は東北地方で起こった或る反乱事件の鎮圧を命じられ、陸奥守として現地に行き見事に任務を果たして武名を高めた。後三年の役の後始末のような事件であったから義家も義光も同じ不満を持ったのであろう。

常陸国に根を張った佐竹氏の祖先であるから悪党と決めつけるのも大声では言えないが源義光という人物を「極悪非道」とした史書は多い。ただ、既に述べたように、一流企業の就職をなげうって

戦場で苦勞する兄・八幡太郎義家の救援に駆け付けた―美談が広まって悪事が伝えられなかった節がある。「嘘」では無いが、平安時代末期の善悪の捉え方が武士を前提とした御都合主義であったと言ふことであらうか。

横道に逸れて申し訳なかったけれども、出羽国の金沢柵に籠って陸奥守源義家の軍勢を相手に果敢に抵抗を続けている清原家衡と叔父の清原武衡の許に画面を切り替えると、一旦は冬の寒さに負けて囲みを解き陸奥国府へ逃げて行った(戦時中の軍部用語では「撤退していった」)源義家の軍勢は春の陽気で元気を回復して再び総攻撃をかける準備をしていた。そこに小人数だが弟の義光がやって来たので指揮官の頭数だけは揃った。前回は予期しない大雪で退却を余儀なくされたから、今回は長期予報で大雪の無いことを確かめ、九月の初めに金沢柵の包囲を完成した。日本外史は兵力数万騎とし、前太平記は四万八千余騎と尤もらしい数字を書いているが、最初に攻めて負けた戦さでは数千騎らしいから、幾ら多くても一万以下であらうか、長期戦になると寄せ手は雪と寒さも敵になり、籠城組は食糧・水が不足して来る。

寛治元年は、昨年と違い秋口からの雪が少なかつた。金沢柵内では食糧、水が乏しく敵の撤退も望めず、次第に困窮して清原武衡が和平策を講じ義光に交渉したのだが、義家は頑として聞かなかつた。そのうちに婦女子が柵の外に逃れ、義家は無慈悲にもこれを捕らえて斬った。吉彦秀武の提言とされる。この男が清原邸の庭に砂金などを撒かなければ、この戦乱は起きず、源氏に付け入る隙を与えなかったのである。嘘や冗談でも金などを撒くものではない。十一月十四日、火を發した金

沢柵は落とされ清原家衡、武衡らは斬られた。多分、助けられた者は居ないと思う。

源義家は鼻高々と「陸奥浮囚清原家衡、同武衡、誅罰、奥羽平定」を公文書で都に報告した。御褒美を下さい：と言ふ要求である。しかし朝廷はこれを「嘘」とは言わないまでも「大義に従った合戦」とは認めず「源氏の私闘」と断定してトイレットペーパー一巻さえも渡さなかつた。証拠品として家衡らの首を都に運んでいた義家の一行は、「褒章なし」と聞くや、その首を途中に投げ捨てたとされる。人の道に外れた行為である。そして義家は解任されて陸奥国を追われた。当時の朝廷にしては良く判断したと褒めたい。こうして前

九年の役から後三年の役に至る一連の争乱で、奥州の豪族は相次いで没落し系列で只一人残つた人物こそが、藤原経清を父に、阿倍頼良の娘を母に、清原武則を継父とし、家衡、真衡らを異父兄弟として育てられた清原清衡であり、やがて平泉に王国を建てて藤原清衡と名乗るのである。それぞれに罪は有つても数え切れない犠牲者を出し、血で血を洗う争いに只一人、勝ち残つた清衡が幾つの提灯をぶら下げ何人の霊を慰めたかは知らないが、古代ペルシアの風習では「盂蘭盆」には死者が故郷へ帰り宴会を開くそうであるから、中には酔つてくどくどと恨み事を言う霊(駄洒落ではなく)が居たと思われる。坂上田村麻呂に代表される征圧事業から、ようやく脱して蝦夷などと蔑称(べっしょう)されていた民族の自治を確立した阿倍氏や清原氏は、これを妬む東国武士団の野望に潰された。しかし奥州の覇者となつた藤原氏も僅か三代の栄華で、源義経と組むことを恐れた源頼朝に滅ぼされる。安倍頼時や清原武則と

同じ立場になった藤原清衡も息子の代になると、やはり相續争いが起こり二代目は基衡が継ぐ。

これは思わず「嘘だ！」と叫びたくなる話であるが、岩手県史によれば清衡夫人は平氏系の女性だったようで内輪もめに呆れて家を出た。都に上り事情を鳥羽上皇に語って、或る武士と再婚したのだが何と、その相手は源義光に殺された源氏の正統・義忠の孫らしい。人間関係は何とも面白いものだが、奥州藤原氏が滅びたのは、その女性に見捨てられた所為かどうかは知らない。

東北地方には「嘘」も含めて隠れた歴史が多いよいうなので「後編」では源頼朝に戻り、その辺りを掘り返してみるつもりである。

コピーフェイス

ダイエットメガネ

菅原茂美

こんなもの世の中にあるのか？ と思ったら、まじめな話。ある種の眼鏡をかけて、小さな食べ物を大きく見せると、普通は満足感を得ない量でも十分満足感を得、ダイエットに役立つのだそうだ。

開発したのは東大の広瀬通孝教授。お菓子など手に持つと、手の大きさは変わらず、持ったお菓子だけが大きく見える。ビデオカメラ連動の眼鏡は、物の大きさを0.67倍から1.5倍に変動できる。メガネをかけた男女12人にクッキーを満足するまで食べさせると、1.5倍に見える場合、眼鏡をかけていない時より、9.3%も量が減り、逆に0.67倍に見えた場合は、かけていない場合に比べ1.5倍も量が増えたという。

(出典：2012/4/4 読売新聞)

《風の談話室》

6月の会報を印刷して数日過ぎたとき、鈴木健兄からハガキが届いた。使い慣れていたパソコンがオシヤカとなり、新しいパソコンに入れ替えたのはいいけれど、使い勝手が異なり思うように使いこなせていないので7月号への投稿はパスさせて下さいとの事であった。

昨年、小生も突然のパソコンの故障で、かなりのデータを送り失い往生した。小生の場合は、新しく買い換えて半年ほど過ぎてからの故障で、やっと使いこなせるようになって、バックアップも十分に行わない中での故障だったので、失ったデータの恨めしいことと言ったら言語に尽くせぬものがあった。

先月、ヨイシヨの会の田島さんが、メールで原稿を送ろうとしたけれど送れなかった、とシートに打ち出した原稿が送られてきたのであった。今月こそデータで頂けるかなと期待をしていたのであるが、残念、シートに打ち出した原稿が送られてきた。しかし、その原稿は、原稿用紙の書式になっただけで、設定が大層面倒くさそうである。小生はそのやり方が分からない。原稿を打つ時には、グリッド線を入れてはいるのだが、シートに打ち出す時には升目は印刷されない。

どうも年を取って行くよ、今自分の出来る範囲から飛び出して冒険してみる事がおっくうになってくるよである。最近、小生もこの傾向が強くなって来た。他人様の事を勝ち誇ったように言うことが出来ないのである。

今、パソコンでのビデオ編集を覚えようとしているのであるが、マニュアルの理解がなかなかでき

ないのである。仕事ではビデオテープでのオフライン編集を山ほどやって来たのに、このパソコンでの編集は思うようには進まない。なかなか覚えられないのである。田島さんの事を口にできる分際ではない。

原稿をワードのデータで送ってもらったことは、編集作業は非常に楽になるのであるが、他人の文章の流れを楽しむと言った喜びがなくなる。タイプすることが非常に楽な人こそでない人がいる。ええッ、こんな表現するの。また、「」にならないの。へ、こんな形容詞を使うのだ。等々読むだけの場合とは違う楽しみがあるものだ。

昔から、文章の勉強には、自分の気に入った作家の文章を何度も清書することだ、と言われるが、清書による読書の楽しさと言ったものもあるのだ。

そう言えば、昔、ナレーターで自分の読む原稿はどんなに長いものであっても必ず自分で清書しなおした原稿で読む人がいた。脚本家（或いは演出家の思いを知って読むためには清書することが一番だと言ったのであった。

彼の曰く、読みやすい文章が必ずしもいい文章ではないし、その人を十分に表現しているともいえない、と言っていた。

確かに、生原をPCに打つことは面倒ではあるが作者を良く知る楽しみも大きいのである。特に会員以外の方の投稿文は打ち込んでいて楽しい気分にはさせられるものである。

最近の若い人達の文章を見ていて、言葉遣いのは説明のための道具だけではないのになァ、と思つことがしばしばある。こんな風に思つたりするのは、小生も年を取った証拠なのかもしれない。

《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

六月ことは座定期公演に参加して

柏木久美子

三日間のことは座公演が終わり、あつという間に一週間が過ぎました。二十一日のテレビ放映には予約録画をしてのぞんだのですが、画面が乱れほとんど見られませんでした。

NHKのプロジェクター生出演さんから番組のコピーを送っていただいて漸く見る事ができました。朗読手話舞が出来上がるまでがわかりやすく作られていました。そして、小林さんの一生懸命さもでていました。

私にとつても今回の公演は新しい試みでした。一つ目はミチオ作品を踊ることができたことです。今までミチオ作品は何曲かまとめて発表してきました。公演だけでなく生徒の発表会で踊ったこともありましたが、私自身はこの数年裏方をやり、舞台上で踊っていませんでした。しかし、自分自身がミチオ作品を踊りたいと切望するようになりました。よくヒロ爺に「あと何年踊れるかわからないからね」と話しますが、機会を捉えて発表を続けていくことは大切だと思えます。

二つ目は日本組曲で作品をつくること。

ヒロ爺は「将門伝説・苺萱姫物語」をつくってくれました。音楽と踊りとどんなふうにつくろかな…と不安でしたが、ピアノによる日本組曲が流れると、だんだん苺萱姫の世界に入っていく、イメージをふくらませることができました。ピアノニストの山本さんの稽古はイメージを深めるためのものとなりました。私は本番三日目の音楽が

一番好きです。三場面連続詩の踊り分けは難しかったです。本番を終えて、ここをこうしようああしようとかまだ考えています。苺萱姫物語はこれから構成を変えて更にバージョンアップして発表できればと考えています。観客の皆さんからのアドバイスも受けながら舞台を語り合うのはとても楽しく幸せなひと時です。

私にとつてことは座で踊ることは「知らない人を知ってもらおう事」ですが、ことは座の白井さん、ギター文化館館長さん、まほらにふく風に乗ってさん、会報やブログに書いていただき本当にありがとうございます、会報やブログに書いていただき本当にありがとうございます、会報やブログに書いていただき本当にありがとうございます、会報やブログに書いていただき本当にありがとうございます、素敵な宣伝になり感謝します。

美浦村・陸平をヨイシヨする会会長の市川紀行さんの作品、「ついに太陽をつかんだ」もとりあげていただき大変嬉しく思います。ヒロ爺は現代詩も素敵に読みます。

残念ながらマカオ公演が延期となり、今後のスケジュールにより参加できなくなるかもしれませんが、おかけしていただくといいです。皆さまにはご迷惑をおかけしました。

十二月の公演の演目が今から楽しみです。

蛍の夜

田島早苗

国会では毎日のように、私利私欲に囚われたお偉い人達の醜い茶番劇が演じられ、山積みする内憂、外憂もなおざりにされている現実。我々は振り上げた拳を何処へ下ろしたらいいのか、心穏やかでない日々が続いている。

「陸平をヨイシヨする会」の仲間も、顔を合わせれば日本の行く末を憂い、何時も「今の子育てに問題がある」との結論に達するのだった。何しろ戦中戦後の耐乏生活をくぐり抜けてきた人たちの採点は厳しい。

先細りしているヨイシヨの活動を何とか活性化したいとの考えも、後に続く若手がいなくて頭打ちの観がある。そんな中「蛍を見に行くのだから案内しますよ」と言うK氏の一言にすっかり盛り上がった定例会は、二十六日の夜を約束してお開きになった。

猫の目のようにころころ変わる気温、まるで春に逆戻りしたような二十六日の夜「こんな寒い日に蛍が飛ぶとは思えないけど」と呟きながら上着を着込んで集まった八名、長靴にカッパを着込んだ人もいて、段々期待感が膨らんでくる。

左右に水田の広がる農道に車を止めて、少し歩いた先にその田んぼはあった。K氏が立ち止った田んぼを覗き込むときらきら光る物が見えた。

「あつ蛍だ！」

大騒ぎしている私達に、

「それは月の光ですね」

とK氏のつれない声。見上げる空に下弦の月が昇り、田の面にまるで蛍の様なきらめきを放っていた。

除草剤を使わず、稲の苗が草の中に埋もれているようなその田んぼは蛍にとつては最高の楽園だった。目を凝らせば草にしがみついて光を放っている蛍を一杯見つける事が出来た。思い掛けない寒い夜に恋の乱舞もまま成らなず、蛍を集めてきてその光で勉強して後に出世をしたという。持参の小さな壺に蛍を捕らえた友が「こんな光ではと

でも勉強など出来ないよね」という。

車胤の故郷福建省にはよほど強い光を出す螢が居たのかも知れない。事実台湾や中国南部はじめ南方諸国には体長が2cmをこえ強くゆっくり光るマドボタルが普通にいるという。

螢はいつ頃から居たのだろうか？ 古事記に豊葦原中国（とよあしはらのなかつくに）を道速振の神・荒振の神などが行くと螢が夜、身を輝かして飛んでいたという記述がある。文学の世界では早くから螢の光が胸の思いを焦がす象徴になっていて、万葉集に始まる幾百千の歌に詠まれている。雄の螢には光を出す線が二本、雌の螢には一本の線がある。この光で相手を誘い誘われ恋が成就するまで乱舞は続く。正に恋に身を焼く螢だ。

螢の乱舞は風のない蒸し暑い夜に行われると言う。一度だけ八郷の俳句仲間誘われて、螢を見に出かけたことがある。その時は闇夜だった。足場の悪い川縁を恐る恐る手探り状態で進んでいるときに始まった螢の饗宴、彩なす光の乱舞、暗闇の中交差しては消える光の残像が水の匂う空間一杯に広がる。思わず息を細めて見入っていたのを覚えてる。

今年の螢狩りは光の乱舞こそ見られなかったが農薬の使用で一時は絶滅したかと思われた螢が生きているのを確認できただけで満足だった。捕らえた螢を戻す友の手元を見ながら「きつと恋が実りますように」と心の中で呟いていた。

螢の光を集めて勉強した車胤、雪明かりで勉強した孫康、中国晋の時代に苦学して成功を収めた二人の故事から生まれた卒業唱歌、「螢の光」も最近は余り歌われなくなっているらしいが、大した努力もなしにのほほんと育った子供達、自分の殻

に閉じこもってゲームに明け暮れている子供達の未来がやけに気になる夜だった。

《ことば座だより》

ドナ・ドナ

白井啓治

第23回定期公演も無事終わった。常世の国の恋物語百、第三十話となる今回の将門伝説・苜萱姫物語は、ホルストの日本組曲をモチーフとした新日本組曲への前哨戦の位置づけで書き下ろしたものであるが予想以上に楽しい出来上がりとなった。これで本格的な新日本組曲に向けて始動する弾みになるだろう。

今回で三度目となる柏木久美子さんとの共演で、小林の柏木さんから盗むものがますます大きくなり、舞のスケール感が一層大きくなってきた。今回の舞台は、小林が将門役を、柏木さんが苜萱姫役を演じ、舞の質がぶつかり合うこともなかったことで、小林ものびのびと舞うことが出来たようである。

一昨年前より話のあったNHKの取材がようやく今回、実現した。6月21日の本放送、29日に再放送があった。若い女性のディレクターであったが小林の良い所を確り見てくれていた番組であった。

今回の公演に限って言えば非常に愉快的な公演となったのであるが、残念なこともあった。8月にマカオでの公演が予定されていたのであったが、ギター文化館での公演終了直後に、突然中止となった。小林は大きなショックを受けたようであっ

た。しかし、公演の中止は残念なことではあるが、海外、特に中国での公演は幕が上がるまでは何が起こつても不思議ではない。

公演の中止は残念なことではあるが、こうした話が柏木さんを通してではあったが出てくること、有難いのだ。こうした話が幾つも出てくる中で、本当に良い話がまとまっていくものだから、良いことの前触れと言う風に考えるべきであろう。

マカオの公演が流れたことで、少し時間の余裕が出来たので、東京公演の企画を積極的に進めることが出来るようになった。ことば座としては災い転じて福来たる、ではないがむしろ良かったのかもしれない。

さて、今回の23回公演は、ふるさと風の会の会報発行6周年記念への応援メニューとして、ふるさと風にご投稿いただいた市川紀行さん作の「ついに太陽をとらえた」と題した詩を朗読させていただいた。当初少し長いので、抜粋で朗読しようと考えていたのであったが、久美ちゃん・稲木さんから折角だから全部朗読して、と言われ丸々朗読することとなったのであった。

ことば座の舞台では、朗読だけという機会がなかったのも、大変ではあったが朗読は楽しいものとなった。問題意識を確りと主張された詩であった事から演者の余計な感情移入の必要がなかった。市川さんから詩のご投稿を頂いたときに、読んですぐにペルーの現代詩人セサル・パジェッホの詩を思い浮かべたのであった。

――生には打撃がある

こんなにも激しい！僕は知らない！

神の憎しみを下す打撃のようない！

あたかもこの打撃をまえに

ありとあらゆる苦しみの

砕けちる波が―― ―（黒い使者どもより）

このパジェットホの詩が頭によぎったのは、市川さんの詩のなかに「ドナ・ドナ」の歌詩が引用されていたせいもあつたのだろうと思う。

ドナ・ドナは、ジョン・バエズがベトナム戦争を反対する反戦歌として歌ったものであつた。

「子牛が首にひもを掛けられるように、無理やりベトナム戦争に徴兵される」という意味を込めて歌われ、60年代の若者、学生たちに大きく支持されたものである。私もドナ・ドナを口遊んだ者の一人であつた。

市川さんも恐らく当時の事を思い起こしながら原発反対の中に引用されたのだろうと思う。

この歌がはやつた当時、ドナ・ドナの歌は、ユダヤ人がナチスからの迫害をうける中から生まれた歌で、ガス室に送られていくユダヤ人たちを紐にくくられて売りに出される子牛になぞらえて作詩したものだと言きかじりに覚えたのであつた。

青春そのものの歌と言えるドナ・ドナを懐かしく思っていた所、6月末の新聞にドナ・ドナの話が出ていた。偶然の不思議と言うか、思いが偶然を生むと言うべきなのか分からないが、こうした事はままあるものである。

ドナ・ドナの作曲者はシヨローム・セクンダで原詩はアーロン・ツアイトリンという作家だと言う。しかも書かれたのは1940年以前の事で、場所はニューヨークであつたという。原詩は私が知っている日本語訳とは全く異なるもので、かなり衝撃的なものであつた。

今回ドナ・ドナの原詩を知って、特に印象的だった言葉は、

『「いったい誰が子牛であれとお前に命じたのかお前だつて鳥であることができただろうに――」であつた。

これを読むと日本語に訳されてヒットした「かわいそうな子牛さんの歌」などでは決してないことがわかる。

『だれが子牛であれとお前に命じたのか』

この言葉を見ると、声に読むとき、原発事故を「想定外」とする安易すぎる言葉の選択には遣る瀬無い思いが押しよせてくる。市川さんの詩の中には「想定外」は心の言葉でも、説明をする言葉でもないことを明確に糾弾している。

いま改めてドナ・ドナの原詩の言葉を知ってみたとき、「想定外」とは「子牛に翼をつけないと誰が決めた」とさも正論ぶつて言うに等しい、貧しい表現の言葉だと思つてしまふ。

『誰が子牛であれとお前に命じたのか』

なんと心に突き刺さる言葉であろうか。「何故、誰が子牛に翼をつけなかったのだ」と想定外にはざく言葉とはあまりにも違いすぎる。

今回、ふるさと風の会報に投稿いただいた詩をことば座に朗読することで、その詩の掲載されているバックナンバーが欲しいと言う人が何人かいらした。ふるさと風、ことば座にとつてこれほど嬉しく意義深いものはないだろうと思つている。

今突然にであるが、河東碧梧桐の「牛が四つ辻でぐるっとみわたした秋空だ」（正確ではないかも……）を思い出した。この俳句は、まさに屠殺場に引かれていく牛を詠んだものであるが、この俳句も朗読者の思いの持ち方で強烈な反戦歌にも、反原発歌にもなりうるだろう。

さて、今回の「将門伝説・苺姫物語」では、久美ちゃんに苺姫の舞いとして三連続に舞う詩を書いたのであつたが、久美ちゃんからは『ヒロ爺の悪だくみ』だと言われた。そしてそのお返しとして『折角だから全部読みなさいよ』と言われってしまったのであつた。ヒロ爺にも意地がある。老骨に鞭打つて30分の声を作つて「ついに太陽をとらえた」を朗読した。しかし、大層に楽しく愉快な舞台となつた。

今回の舞台は、演者のそれぞれが、それぞれの意義ある挑戦がかなえられた内容になつたと思つている。特に小生に於いては、ピアノの演奏に乗つてマイクも使わず朗読するなどという大冒険もやつてみた。将門の舞を鼓ならぬコンガを用いて一調の舞を模して演じて貰つた。既成を突き破つて自由で自在な舞、を奔放に愉快して楽しむことが出来たと思う。

ところで「縁は異なるもの」とは男女の結ばれる縁とは不思議なもの、と言う意味なのではあるが、最近ではどのような縁にも用いられている。そこで些かむさ苦しいが後期高齢者の男の縁について話してみたいと思う。

今回奇しくも「ついに太陽をとらえた」の詩を朗読させていただいたのであるが、作者の市川紀行さんとは、旧八郷町の富士山に「スワラジ学園」を主宰されている合田寅彦さんの紹介で知り合うことになつたのであつた。

市川さんは美浦村で四期村長をつとめられた方で、市民劇団「宙の会」を主宰されている。合田さんとは大学の先輩後輩の仲だそうで、最初の紹介は実にそつけないものであつた。「白井さん、私

の後輩でこんな戯曲を書いた者がいるのだがよかつたら読んでみませんか」といわれ「ゴッホとゴーギャン」という戯曲を預かったのであった。その時、近いうちにまたこれを公演するそうなので、その時にはまた案内します、と言われたのであった。その戯曲は、実に懐かしい臭いのする本であった。私が、演劇を始めた60年代に引き戻される感じのする本であり、当時の学生演劇の臭いのぷんぷんするものであった。それは2008年6月のことであつたと思う。読み終わった戯曲をお返しに行くと、7月13日に美浦村の公民館で公演があるのでよかつたら行ってあげてください、とチケットを頂いたのであった。

公演当日は、風の会の兼平さんをお誘いして出かけたのであったが、舞台を創る人たちよりも観客の人達に驚かされた。演じる者と観る者が一体となった舞台創りがなされていたのであった。市民劇団の正に見本を見るようであった。そのことを早速風の会の会報に書いたのであった。

その会報は合田さんから市川さんの元に届けられ、市川さんからは早速お手紙を頂いたのであった。以来お付き合いを頂くようになり、陸平で小林の朗読手話を披露させていただくとともに、柏木久美子さんとの共演がはじまり、今回で三度目の共演になった。

市川さんとお会いした時に、学生演劇の事、詩人ランボーの事などを聞き、私も高校時代にランボーの詩に傾倒したこともあって、当会報にはランボー世代などと書かせてもらっている。

5月の末であった。合田さんからまた一冊の本を頂いた。1960年代の青春残像を描いた山本茂著の「融雪期」である。市川君の事も出ている

ので是非読んでみてください、といわれて早速読ませてもらった。私よりも三、四年上の人達の青春残像であつたが、非常に懐かしい思いで一気に読まれた。サロメを日本版に脚色した黒姫なる演劇を上演するまでの話しを軸にした1960年代の青春残像である。

この「融雪期」を読みながら、私自身の学生演劇の時代に交わされたこんな話を思い出した。新入生の歓迎コンパの席であつた。ランボーの話が出たときであつた。T子という四年生が、「もうランボーなんて陳腐。今はね、ジュネよ。ジャン・ジュネ」とベレー帽を斜にかぶって話しながら、突然私に「ねえ、チェリーブランド奢って」と言った。こんなことを思い出しながら、私はまたそんな時代をまねてもう一度歩こうとしているのだろうか、と思つてしまった。

だが、久美ちゃんから言われて歩き出した「新説・日本組曲」は青春残像の最後のページになるだろうが入りたいと思つている。

男女間に係らず縁とは実に異なるものである。

風の定例会では、いつも会員の増えないこと、若返りが進まないことの話がでる。今月の田島さんの文にも陸平をヨイシヨイする会の先細りを心配される話がかかれていた。

しかし、ヨイシヨの会は風の会とは天と地の違いがあり、当会は先細りどころか明日にも強がり可言つていられなくなりそうな状態である。だが悲観的な事はかりを思ついても何も生まれぬ。我が年齢は若返らないが悪態は田々に若返らせることはいふ所。

老いてますますの斬新なる悪態を、既成を打ち破

る悪態を研鑽に磨きをかけて吐いていこうと思つ。金を溜め込んで死ぬてしまえば自分にとつては何の意味もない。生きていこう方に使つてこそ、意味や意義が生まれる。脳みそだつて同じである。人は、己の脳みその半分も使わないうちに命を閉じるのだと言つ。脳みその活用を半分残したつて誰も喜ぶもしない。使い切る事は出来ないだろうが既成を打ち破る悪態をつくために存分に使つて命を終りにしたいものである。

悪態は、陰でつけば姑息な役立たずになるが、大声で皆に分かるように吠えれば、それなりに意味を持つてくるし、夢を創る力にもなると言つものである。

(山口龍)

《ふうの》

アレン・ジュマ・蕎麦会席料理のお店じゃ。

(キター文化館通)

看板娘(犬)「うらじ」ちゃんが

皆さんをお迎えいたします。

電話0299-24-2063

編集事務局

T315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>

ギター文化館 2011 CONCERT SERIES

オカリナ奏者野口喜広と脚本家白井啓治の

第3回 里山と風の声コンサート

9月9日(日曜日)開演 PM3:00(開場 PM2:30)

常世の国へふらりと迷い込み、雑木林と風に語りかけるしか術を持たぬ瘦男白井啓治と常世の海と里山に魅せられ、大地に母の詩を土笛(オカリナ)に声する夫(つま)野口喜広と妹(いも)矢野恵子が出会い一緒に風に声することになった。

今回の野口喜広のオカリナ・コンサートは、CD「土笛～めぐる^{いのち}生命～」(オリジナル10曲:税込2500円)のリリース記念として、CDに収録した楽曲を中心にお届けします。

また白井啓治の朗読「風の声」は、ピアニストの山本光とのコラボレーションでお届けします。

コンサート料金 3500円 事前購入の場合は3000円 小・中学生券2000円

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35

Tel 0299-46-2457 fax 0299-46-2628

ふるさと風の文庫新刊案内

◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の作品が全集となります。今回は第1～6巻が発売されます。(各巻1200円)
(歴史の里石岡とは言われながら、多くの歴史・文化が忘れさらられていく中、伝え残していかなければならない歴史・文化を独自の打田史学をもつての視点で、改めて見つめなおした作品集)

◎兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)
(ふるさと石岡の絵散歩文庫。東日本大震災の被害に合う前の、貴重な石岡史跡の絵が満載です)

※ギター文化館および街角情報センターにて発売しております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

第15回ふるさと風の文庫新刊案内

オカリナコンサート

7月21日(土曜日)、22日(日曜日)

午前11時～午後2時

オカリナ 野口喜広

キーボード・パーカッション 矢野恵子

ギター 水上喜子

行方白井上「ふるさと風の会」